

中国語助動詞“能”の意味

白 木 通
邱 靖 媚

キーワード

- ・ 評価：comment
- ・ 条件：condition
- ・ 能力：ability
- ・ 可能性：probability
- ・ 許可：permit

はじめに

“能，能够，会，可以，可能，得 (dé)”などの、可能を表す助動詞には、大別して「能力」「可能性」「許可」の三つの意味があるとされてきた。しかし、従来の記述においては、この三つの意味に区分の基準があるのか無いのか、あるとすればどのような基準であるのか不明確であり、中国語話者による例文を参考にしながら見当をつけるという学習にならざるを得なかった。

三つの意味それぞれに対応する文法的特徴があるのか、三つの意味の関係はどのようなものであるか、さらにいえば、三区分すること自体適当なのか。助動詞による可能表現全体の表す意味を、内的な構造において明確に把握したいというのが筆者の問題意識である。しかし助動詞は統語論的にそれぞれ個性が強く、一括して論ずることが難しい。よって、さしあたり分析の対象を

“能”による助動詞文のみに絞って考察する。“能”は三つの意味全てを含んでいる。いかえれば全ての意味領域に分布するとされているからである。“能”の助動詞文の表す「可能」の意味の構造的把握のため、その手がかりとしてまず可能の助動詞に関する従来の記事とその“能”の例文を再検討する。このことを通じて、先に述べた、三つの意味それぞれに対応する文法的特徴があるのか、三つの意味の関係はどのようなものであるか、さらにいえば、三区分すること自体適当なのか等を、“能”の助動詞文についてみていくこととする。“能”はn，“能”による助動詞文をn文，と略記し，nがn文中で「能力」「可能性」「許可」の意味を表すとされる時，nおよびn文を次のように置くこととする。

	n	n文
「能力」	n 能力	n 能力文
「可能性」	n 可能性	n 可能性文
「許可」	n 許可	n 許可文

1. “能”による助動詞文の意味の概括

1.1 可能を表す助動詞の意味についての従来の記事とその検討

朱徳熙 81 は「可能とは以下に挙げるような状況を指して言う」として次のように記述している。

①能力に関して

「行為主体の能力がある事態を達成できるか否かを言う」(a と置く 以下 b, c, 例文 a, b, c も同様一筆者)

例文 a; n 挑二百斤的担子上山。「朱能力」

②可能性に関して

「外界の可能性を言う」(b)

例文 b ; 干這種事的人還 n 是好人 ? 「朱可能性」

③許可に関して

「状況としてあるいは道理として許可されうることを表す」(c)

例文 c ; 教室里不 n 抽烟。「朱許可」

会騎自行車的人都 n 参加。「朱許可」

以上の記述 a, b, c において、省略されている文言を補ったうえで模式化することによって、n 能力文・n 可能性文・n 許可文のおのおのについて、一般的構造を導き出す。さらにそれぞれ例文 a, b, c の構造と対応させて、妥当か否かを確かめる。() のなかは筆者によるものである。

①能力

a の記述は次のように補足できる。

「行為主体 (n に後続する動詞によって示される行為の主体) の能力がある事態 (行為自体, または行為によって実現されること) を達成できるか否かを (話し手が可能であると評価して) 言う」

ここで問題となるのは、(話し手が可能であると評価して) という文言を補足するのが妥当か否かということであるが、これについては後に触れるのでここでは説明抜きに筆者の考えを結論的に記しておく。

a を n 能力文の一般的構造に対応させてさらに模式化すると

a → (話し手が以下の [] が可能であると評価する—以下「評価」と略す)
[行為主体の能力が達成できるある事態を]

これを例文 a に即して見てみる。

例文 a → (話し手) n 評価 [(行為主体) n 能力 挑二百斤的担子上山 (=事態)]

n は n 能力文において、「評価」と「能力」の二重の意味をもつと考えられる。

このことについて、特に n 評価の妥当性について検討をくわえる。

今まで見てきたように朱は、「能力」を表す助動詞文に関する記述で、「行

為主体の能力が達成できる」ことを「ある事態」と述べている。しかし、n能力文においては、より具体的には人間の「(意識的) 行為」そのもの—例えば“走路”，または「(意識的) 行為とその結果」—例えば“完成任务”—である（「V / V + 結果」と略記し、「事態」に替えて「事柄」を使用する）。このような「事柄」については、獲得した表象またはその集積を、そのままあるいは概括的に話し手の考えを加えないかたちで、再び表出ないし叙述することが可能である。

例文 a は n が無ければ、叙述の文にもなれる。日本語訳文の格助詞「が」がそれを示している。（下記の例甲）ところが n 能力文は、一般に主題についての評言となる。すなわち主題に対する話し手の判断を表す。評言となっていることのひとつの例証として日本語の訳文の格助詞「が」と可能表現が共起しないことをあげた。（例乙）「能力によって行為が可能である」主体（「能力行為の主体」と略す）は“小林”であるが、「文の表すことについて可能である」と評価している主体（「評価の主体」と略す）は話し手である。このことは話し手が同時に行為の主体であるときも基本的には変わらない。「行為が可能である」のは「能力行為の主体」としての“我”であり、「可能である」と評価しているのは話し手＝“我”である。（例丙）

例甲；小林挑二百斤的担子上山。

[小林が／は百キロの荷を担いで山に登る]

例乙；小林 n 挑二百斤的担子上山。

[小林は百キロの荷を担いで山に登れる]

[？ 小林が百キロの荷を担いで山に登れる]

例丙；我 n 挑二百斤的担子上山。

[私は百キロの荷を担いで山に登れる]

[？ 私が百キロの荷を担いで山に登れる]

李臨定 90 の記述では、“表示主観上有能力（做某事）”[主観において（何かを行なう）能力が有ることを表す]としてつぎの2例を挙げている。ともに「能力行為の主体」と話し手が一致している文である。

我們 n 按時完成這項工作。「李能力」

我不 n 再幫助你了。「李能力」

能力は抽象的な概念で、客観的存在としての具体的表象に乏しい。従って、その存在は確かには「能力行為の主体」のみが知っていることになりやすく、他者からの言及には常に不確定性が伴う。しかし李のように「主観において」とし、n 能力文を一人称の文に限定すると、上記の例乙のような n 能力文を排除することになり非現実的である。この不確定性は当然あるものとして、話し手の評価として n 能力文の意味の中に包括することによって解決される。n 能力文の n の意味を n 能力のみに規定すると問題は解決できない。

以上の検討を通じて、n は n 能力文において「n 評価」の意味もあると前に結論的に述べたことには妥当性があると考えられる。

ところで、n には他に n 文の意味にとって重要な統語論的機能がある。n を中心に前項に可能の条件（n 能力文の場合、具体的には能力の主体）が示され後項に実現可能の事態（n 能力文の場合、具体的には上で述べた「事柄」）が示されるということである。この機能を「条件」と称することとする。

例文 a: n 挑二百斤的担子上山 が n 能力文とされるのは前項が行為主体であることのみが記述されているからである。仮に前項に未来のある時点のみが示されると n 文は可能性を述べる色合いが濃くなる。

明天 n 挑二百斤的担子上山 (ba)

[明日は～中略～登れる (だろう)]

従って、n 文において n は、n 評価・n 条件であることを前提に n 能力であるといえる。以下に具体的に示す。

n 評価—前項を条件として後項の実現が可能であると評価する。

n 条件—前項に可能の条件として行為主体が、後項に主体的行為が示される。

n 能力—n 評価・n 条件を前提として n は能力の意味を獲得する。

②可能性

助動詞の表す「可能性」についての朱の記述 b と例文を模式化する。

b→ (話し手が以下の [] が可能であると評価する—「評価」と略す)
[外界 (話し手が外界の事として取り上げる何事か) の可能性]

例文 b→ (話し手) [干這種事的人 n 是好人]
(根拠) (条件) (結果)

他の用例；雨停了，明天 n 晴吧？ ※

一雨停了，(話し手) n 吧？ [明天 n 晴]
(根拠) (評価) (時間的条件) (条件) (結果)

※朱の b のコメントのところで n の例文としてではなく“会”の例として“看样子会下雨。[見たところ雨が降りそうだ]”をあげている。

n にもほぼ同じ用例があるのでそれをここでは例文の一つとしてあげた。

n 可能性文において，n は次の意味と機能をもつと考える。

n 評価—前項を条件として後項の実現が可能であると評価する。

n 条件—「外界」について，前項に発現の条件・根拠，後項にその結果を示している。

n 可能性—n 評価・n 条件を前提として，n は可能性の意味を獲得する。

外界についての可能の評価とは，可能性のことである。

③許可

c→ (話し手が以下の [] が可能であると評価する) [状況あるいは道理
(を根拠) として (主体の行為が) 許可される]

例文 c1→ (話し手) 不 n 教室里 n 抽烟
(評価) (根拠) (条件) (主体の行為)

c2→ (話し手) n 会骑自行车的人 n 参加
(評価) (根拠) (条件) (主体の行為)

この時 n の意味は次のようになる。

n 評価—前項を条件として後項の実現が可能であると評価する。

n 条件—前項に後項の発現に対する主として社会的制約的条件・根拠，後項に主として人の主体的行為を表す自主動詞がくる。

n 許可— n 評価・n 条件を前提として、n は許可の意味を獲得する。

1.2 n の意味と機能の概括

以上の検討をまとめると、おおよそ次のようになり、助動詞 n が助動詞文のなかで表す意味は、「能力」・「可能性」・「許可」が並立し、これらの総体が「可能」として括られるというものではないことがわかる。

1.2.1 n の意味の基本的要素はつぎの 5 点である。

- (1) n 評価—前項を条件として後項の実現が可能であると評価する。
- (2) n 条件— n を中心に前項に可能の条件が示され、後項に実現可能の事態が示される。
- (3) n 能力— n 評価・n 条件—前項に可能の条件として行為主体が、後項に主体的行為が示されるとき、これを前提として n は能力の意味を獲得する。
- (4) n 可能性— n 評価・n 条件—「外界」について、前項に発現の条件・根拠、後項にその結果が示されるとき、これを前提として n は可能性の意味を獲得する。
- (5) n 許可— n 評価・n 条件—前項に後項の発現に対する主として社会的制約的条件・根拠、後項に主として人の主体的行為を表す自主動詞がくるときこれを前提として、n は許可の意味を獲得する。

能力、可能性、許可の三つの意味全ての前提として評価、条件がある。条件の違いが意味の分岐にとって大きな影響を与えるであろうことは見てきたとおりであるが、n の前項と後項を厳密に確定するとき、n 評価がどこにかかるかをまず見なければならぬ。しかし、この問題全体は複雑で長年の論争的でもあり本稿では扱いかねるので、n にかならず後続する述詞（動詞／形容詞）または述詞フレーズの特徴と意味の関係に若干ふれたうえで、条件と意味の関係を概括的にみていくこととする。

2 “能”の助動詞文の意味とその条件

2.1 後続する述詞の特徴と意味

一般に助動詞に後続する動詞などの述詞あるいは述詞フレーズは、中国語の述語の一般的特徴を持っている。例えば重畳形になることができる、動詞接尾辞・各種の補語を伴うことができる、“地”を伴った連述修飾語をとることができる、“不”“没有”で否定できるなど。また、構造的にも、朱の述べているように、「単独の動詞あるいは形容詞であってもよいし、主述構造、動目構造、動補構造、述連構造、あるいは副詞が修飾語となっている偏正構造などであってもよい」。しかし、助動詞文の意味と、後続の述詞等の成分は深く関わっている。この点の特徴的なものについて幾つか挙げる。

2.1.1 自主動詞か否か

この点で最も大きな特徴をなす文は、nに後続する述詞が非自主動詞の文である。非自主動詞の場合は「可能性」しか表せない。つまり、非自主動詞は意識的に能力を発揮して行なったり達成したりするものではなく基本的に不確定性が高い。従って、「能力」を表すnとは共起せず、同様に意識的行為を前提とする「許可」のnとも共起しない。状態や属性を表わす形容詞とも共起しない。以下は可能性のみを表す。

n 遇 n 忘 n 病死 n 敗 n 認得

n 好 n 壞 n 低

ただし、可能性の意味の文の全てが非自主動詞というわけではない。例えば、1.1 でみたn能力文も場合によってはn可能性文となる。

小林自己一個人n挑二百斤的担子上山。

[小林は自分一人で～中略～登ることができる]

明天n自己一個人挑二百斤的担子上山嗎？

[明日～中略～自分一人で登るなんてことがありうるか]

2.1.2 述詞のその他の特徴と意味

イ n 可能性は動詞の重畳型と共起しうるが、n 能力 n 許可は共起しえない。

他希望校長能主動地談談房子的事。

ロ n 可能性は、程度補語と共起しうる

只有藏族作家才 n 写得這麼切實有力。

他只要試験个十天半月的，就一定 n 跑得有个樣子，……（老舍「駱駝祥子」）

n 可能性は、可能補語と共起しうる

您逃脫得了你自己的那段歷史嗎？

ハ助動詞に後続する動詞は動詞接尾辞をとることは通常不可能である。n も例外ではない。しかし、次のように修飾成分として共起している例はある。

下例は n 許可と n 可能性

不 n 只看着不幫助

只 n 看着氣死（魯迅『故郷』）

ニ n 可能性は、後に形容詞の重ね型をとることができる。

在他面前哈時候也不窩窩囊囊。

2.2 条件と意味

2.2.1 能力と可能性の区分における条件のちがい

一般に主体的行為に個別的一時的な制約条件あるいは文全体に不確実性がたかまると後項実現の要因に外的・偶然的要素の比重がたかまり、「能力」より「可能性」の意味の比重も高まると考えられる。また前項において「行為の主体」のちがいや捨象、他の要素の搭乗による焦点の移動も意味の変化に大きな影響を与える。次の例は同じ自主動詞の n 文の意味が語彙的環境によって n 能力文から n 可能性文に変化するのを示したものである。

我 n 挑二百斤的担子上山。

他明天 n 挑二百斤的担子上山。

明天他 n 挑二百斤的担子上那座山。

明天 n 挑二百斤的担子上那座山。

他 n 挑二百斤的担子上山？

下這麼大雨 n 挑二百斤的担子上山？

2.2.2. 能力と許可の区分における条件のちがい

統計的に n 許可文は否定の形が非常に多く、次に疑問の形が多く、肯定文は極めて少ない。社会的道義的制約を受けるマイナスイメージの行為を禁止あるいは疑問を提出する時に使われるためである。これに対して n 能力文はプラスイメージの行為を評価することが多い。次の例は n 能力文から n 許可文に変化したものである。形を全く変えることなく、文脈の中でその意味がマイナスに転化することがあるのである。

我不 n 再幫助你了。(李 90)

→ 沒钱了，我不 n 再幫助你了。

[お金が無くなったので、もうあなたを援助できません]

→ 我親眼看見你做了這件壞事，我不 n 再幫助你了。

[君がこんなに悪いことをしたのを自分の眼で見てしまったので、もうあなたを援助できません]

以上で本稿を終えるが n 文の意味を 5～8 区分している資料もあり、これらの意味と文構造の関係の更に具体的な検討は、再度の機会をのぞみたい。

参考・引用文献

朱德熙『文法講義—朱德熙教授の中国語文法要説—』白帝社 1995 (1981 に出版された『語法講義』の訳書 原文は筆者未見)

李臨定『現代漢語動詞』中国社会科学出版社 1990

胡裕樹・範曉『動詞研究』河南大学出版社 1993

馬慶株『漢語動詞和動詞性結構』北京語言学院出版社 1992

呂叔湘主編『現代漢語八百詞』商務印書館 1981